岩手・比爪（ひづめだて）館遺跡

1 所在地　岩手県紫波（しわ）郡紫波町南日詰（ひづめ）字箱清水（はこしず）

2 調査期間　一九八二年（昭57）七月～九月

3 発掘機関　紫波町教育委員会

4 調査担当者　熊谷義昭・花篭博文・鎌田祐二

5 遺跡の種類　集落跡及び城館跡

6 遺跡の年代　一〇世紀後半～平安時代末期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

比爪館遺跡は、東北本線日詰駅の東南約五〇〇mの町立赤石小学校付近に所在し、標高約九八mの微高地上に立地する。

（日　詰）

比爪館は、『吾妻鏡』によると、平安時代末に存続した奥州平泉藤原氏の分族、比爪氏の居館である。周辺一帯にも、平安時代末から中世にかけての遺物が比較的広範囲に分布している。

当遺跡は、一九七五年より断続的に発掘調査が実施されており、比爪館以前の遺構・遺物の存在も確認されている。今までの調査の結果、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡などの遺構を検出し、それらに伴う遺物として土師器・須恵器・あかやき土器や美濃産灰釉陶器・中国産白磁・青磁片および古銭や種子などが出土している。木簡は、一九八二年の第六次調査の時に井戸跡から一点出土した。井戸跡には、底部に方形の枠板組が残存し、木簡はその内部埋土より出土したものである。

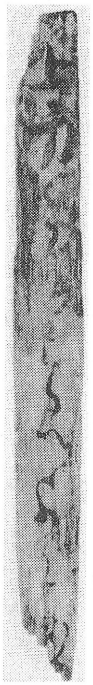
8 木簡の釈文・内容

(1)　(170)×17×7　019

「上□□□□つよく□□□」
（方）（ち）（か）

赤外線テレビにより解読を試みたが、その結果、岩手県内初の仮名混じり木簡である事が判明した。しかし、内容などは不明であった。墨痕は、表裏両面に認められたが、一面は判読不能であった。もう一面には、漢字で「上」と、仮名で「つよく」だけが判読できる。

9 関係文献

紫波町教育委員会『比爪館遺跡――第六次発掘調査報告書――』（一九八三年）

（花篭博文・鎌田祐二）